〔優秀賞〕

◇ 自分らしく生きる ◇

あそ野学園義務教育学校　6年　小川　漣

ぼくの両親は仕事をしています。ぼくが幼稚園に通っている時からその働いている姿を見ているので、それが当たり前だと感じていました。お父さんは朝早く家を出て、帰りも遅い時間に帰ってきます。そのため、平日に行う洗濯や掃除、食事作りなどの家のことはお母さんがやっています。また、お母さんの仕事は不規則なので、祝日や日曜日に仕事に行くことが多いです。その時は、お父さんが掃除や食事作りなど、家のことをやっています。ぼくの家ではこのような生活が当たり前で、誰も不思議に感じることはありませんでした。

ぼくは歴史が好きなので、図書館で歴史に関する本を読むことが多いです。その中で、昔の人々の生活について書いてある本がありました。昔の人々の生活は、現在の生活とは異なる部分が多く、電化製品などもあまり発達しておらず、さまざまな工夫をして日々の生活を乗り越えてきたことを知りました。その中で、男の人は外で働き、女の人は家の中を守るという考え方があったことも初めて知りました。昔は女の人が外に出て働くことはあまり賛成されなかったことを知り、おどろきました。今では、一歩外に出ると、いろいろなところで女の人が活やくしている姿を見ることができます。ぼくのお母さんも、ずっと目指していた資格を取り、とても楽しそうに仕事をしています。そんな姿を見ると、昔の女の人も外に出て働きたかったのではないかがまんをしていたのではないかと感じます。男の人が働いて、女の人が家を守るという考えは、きゅうくつなのではないかと思えてきました。男の人だから、女の人だからという考えをなくして、もっと自由な形で働くことができたらいいと思います。男の人で家事が得意な人もいるかもしれないし、女の人で家事があまり得意ではなく、外で働きたいと思う人もいるのはないかと思うからです。まわりの人がその人の役割を決めつけるのではなく、その人にあった形で、自分で選択していく人生を送ることが、本人にとって幸せなことなのではないかと思いました。

ぼくのお父さんは、料理が好きで、いろいろな物を作ってくれます。お父さんが作ってくれたご飯は、とてもおいしいです。ぼくのお母さんが、自分が好きな仕事を続けていくことができるのは、お父さんが協力をしてくれるからとよく言っています。おたがいに助け合うことで、今の生活を続けることができることを知りました。これからは、ぼくも自分にできることを考えて行動をするようにしたいです。男の人だから、女の人だからという考えはもたず、自分の家族のように、一人の人としてその人を見ていくよう心がけたいです。